

1877年のアメリカ鉄道ストライキ(II)

小澤治郎

本稿は(Ⅰ)で見た東部の諸事件に続いて生じた西部の諸事件を対象とする。

5. オハイオ州¹⁾

最初にストライキのおこったバルティモア・アンド・オハイオ鉄道のストライキが西漸したのがオハイオ州であった。²⁾ ニュワークで、バルティモア・アンド・オハイオ鉄道はピッツバーグ・シンシナティ・アンド・セント・ルイス鉄道(通称パン・ハンドル鉄道)と交叉していたが、この地がこの地方の鉄道中心地であった。7月18日にはバルティモア・アンド・オハイオ鉄道のブレーキ係と火夫たちがストに入り、貨物列車の運行を停止し、すべての貨物列車の機関車が切り離され、火が落された。リッキング郡の保安官が労働者の解散を命じるが、それは拒絶され、かれの要請によってヤング・オハイオ州知事が州軍を出動させた。州軍は21日夜に到着したが、かれらはストライキ参加者たちに同情的で、信頼できなかった。22日にはパン・ハンドル鉄道労働者もストに参加し、ニュワークに集ったが、一方、ニュワーク周辺の炭坑労働者たちや鉄工労働者たちも支援の態勢をとった。このころまで暴力は使用されなかったが、23日朝、ほとんど鉄道労働者を含まない群集がコロンプス市のユニオン・デポット駅に集り、周辺地域の鉄工場などを、労働者にスト参加を説得するため巡回し始めた。それらの工場の多くの労働者たちはストに参加し、(それはかなり脅迫的になされたらしい)午後には1000

人を超える群集がユニオン・デポットに集った。(この中には鉄道労働者は少なく、ブレーキ係とスイッチ係たちは自分たちがその集会とは無関係であると宣言している。)23日午後、コロンブス市長は布告を出すとともに、数百人の臨時警官を任命して事態の鎮圧にあたり、24日にはすでに多くの工場が操業を再開し、それ以後騒動は起らず、8月2日にはバルティモア・アンド・オハイオ鉄道もバン・ハンドル鉄道も貨物輸送を再開した。

バルティモア・アンド・オハイオ鉄道の沿線のその他の都市、たとえばザンネスヴィルでも23日を中心に、コロンブスの場合と似た騒動が見られた。またクリーヴランド市³⁾もニューヨーク・セントラル鉄道のレーク・ショア・アンド・ミシガン・サザン線が通過していたが、ここでも20パーセントの賃上げを要求するストがおり、またレーク・ショア鉄道の貨物部門でも1日10時間労働に対して1.5ドル、日曜日には2ドル、その他の超過勤務手当を要求するストライキが起り、クリーヴランドから少し離れた鉄道中心地コリンウッドで23日にはほとんどの列車が停止状態となった。この状態は7月31日まで続いたが、労働者側はこのころから断念し始め、実質的には元のままの賃金にいささかの手直しをただけで、レーク・ショア鉄道は再開した。⁴⁾

またレーク・ショア鉄道沿線のトレドでも、25日もしかこれらのスト参加勧誘に従わなければ施設を焼打ちするという脅迫をまじえたデモの形の群集運動が勃発し⁵⁾、とくに穀物の価格を決定するとされたthe Board of Tradeが狙われた。市長は、驚いて武装した市民たちを保安官の指揮の下に各隊に分って市街をパトロールさせ、隠された武器を徴収した。その後数日間、数百人の臨時警察官が市街をパトロールして、スト参加指導者を逮捕して廻り、全市の商業活動はこの間全面的に停止した。

シンシナティ市⁶⁾でも、23日からオハイオ・アンド・ミシシッピ鉄道の列車乗務員がストに入った。シンシナティ・ハミルトン・アンド・デイトン鉄道では、この報せを聞いて経営陣が賃金切り下げを撤回したため、ストは生じなかった。22日の午後から市内各所で集会が開かれ始め⁷⁾、23日には興奮し

た危険な状態となった。折柄州軍の大部分はニューワークへ出勤中で、暴徒たちは干渉を受けないことから勇気を得、午後にはストライキの主導権は鉄道従業員の手を離れてしまった。大部分は13才から21才の青少年からなる千人余の群集が、シンシナティ・ハミルトン・アンド・デイトン・デポットを取り巻き、機関士やレール工場の労働者を追い払った。市内の銀行や大工場にたいする襲撃の恐れもなくはなく、市内の交通が中止したため、数千人の工場労働者は帰宅すらできなかった。このように23日の夜はシンシナティは暴徒のじゅうりに任され、大事には至らなかったが少数の鉄橋放火事件や食糧運搬馬車の略奪も見られ、24日朝の事態は予断を許さないものがあった。ここに至り市民たちが自警的方策をとり始め、とくにシンシナティで特徴的であったのは、各鉄道の労働者たちが武装して列車の運行を護衛したことであった。この行動はかなり決然と行なわれたので暴徒たちもこれは襲撃せず、事件は生じなかった。またストライキに入っていたオハイオ・アンド・ミシシッピ鉄道の従業員たちも、暴徒たちと行動をとることを拒絶した。市内でも市警察部長会の呼びかけに応じて、多数の市民が臨時警官に志願し、24日夜には事態は平静に向った。

- 註 1) 叙述の順序は Edward Winslow Martin, [James Dabney Mac Cabe]; *The History of the Great Riots, together with a full History of the Molly Maguires*. 1877. を中心とする。
- 2) ニューワーク、クリーヴランドなどオハイオ州の鉄道中心地の場合は、バルティモア、リーディング、バッファロー、とくにピッツバーグの例を見て、輸送阻止を実力で突破しようという政策はとられなかった。Robert Bruce; *1877: Year of Violence*. 1959. p.203.
- 3) クリーヴランド市は、1850年代の鉄道の開通以来、近辺の石炭や鉄の資源が開発され、各種鉄および鋼鉄製品、鉄道車輛、鉄橋、ミシン、ベンキ、紙、羊毛などの製造業やスタンダード・オイルを中心とする石油精製業が栄え、ドイツ人、アイルランド人、ボヘミア人、カナダ人らの移民が40パーセントを占める、煙に覆われた新興工業都市に成長していた。Bruce, p.204.
- 4) クリーヴランド市が比較的平静であったことには、前述の当局側の態度とともに、1877年4月のスタンダード・オイル会社のたる製造労働者のストライキを中心とす

る下水設備工、練瓦工、煙草労働者などの運動があり、その中で匠延工場労働者の組織化が失敗するなど、労働者側は落胆し、市の保守的要素が硬化し、憤激していたという事情があった。Bruce, p.204。

- 5) これは最初労働者集会の形をとり、「十人委員会」が選ばれ、要求賃金の決議が行なわれ、安全委員会を選んで非暴力的なデモが始まった。Bruce, p.208。
- 6) この市も急速に工業化し、1877年1月にラフカディオ・ハーンが描写したところによれば、「同じように倒れそうな家、同じようにひびの入ったストーヴ、同じような色あせたぼろの空想的な綴り織をかけたうす汚れた壁と鋭い輪廓の顔のグロテスクなシルエット、……うす暗い借家と荒れ果てた小屋、醜さと暗さを思わせる奇妙な名前の行きどまりの汚い路、……黒い板と曲りくねった廊下とこわれた階段をもった、古い部屋が無限に並んだ、床が斜めになり、壁がひん曲った、ガタガタのストーヴとひどい匂いをもった、夢のようにぐらぐらした家々」が当時のシンシナティの労働者の住居であり、このようなスラム街に当時かなり多数いたドイツ移民のマルキシズム的考えが、ダイナマイトの導管の役割を果たした。Bruce, pp.230~231。
- 7) この日から、赤旗が Workingmen's Party のバンドの指導の下に街頭に現われた。集会ではボヘミア人や黒人の学校教師などが演説した。Bruce, p.231。
- 8) 24日午後にも数百人の群集が、インディアナポリス・シンシナティ・アンド・ラファイエット鉄道の労働者を棍棒で追い払うという事件が生じた。Bruce, p.206。

6. インディアナ州

この州にも、ペンシルヴァニア州で始まったピッツバーグ・フォートウェイン・アンド・シカゴ鉄道の賃金切下撤回要求のストライキが伝播した。それは21日始まったが急速に沿線に広がり、貨物列車が運行を中止し、ウォバッシュ鉄道などの労働者も援助を申し出た。経営陣や管理部が列車を運行しようとするが阻止され、master mechanics や、superintendents や、masters of transportation などは機関車に近づくことを許されなかった。警察の努力も空しく、22日にゾリンガー・フォートウェイン市長は、群集に解散して秩序を乱す行為や交通の妨害を中止するよう布告を出した。23日のフォート・ウェインの情勢は騒然とし始め、ストライキ参加労働者たちは約1,000人の労働者が働くピッツバーグ・フォートウェイン・アンド・シカゴ鉄道の各

工場へ押しかけ、半ば強制的なストライキ勧誘を行い、一部では放火事件も生じた。さらにストは拡がり、午後には労働者の大集会が開かれ、7月1日以前への賃金の復帰と、一般労働者と技師の階層別賃金制の廃止が決議された。そして、この際かれらの出したストライキ参加者たちへの呼びかけは注意すべきであると思われるので引用しよう。

ストライキ参加者たちへ——ピッツバーグおよびその他の鉄道中心地からの人命と財産のおそるべき犠牲に関するニュースは、諸君たちすべてが考えるべき問題である。最新の電報によれば、会社の財産の大規模な破壊に積極的に参加している労働者のパーセンテージはひじょうに小さく、それは大部分、そのような行動によってストライキ参加者たちの希望を表現していると信じている外部者たちによってなされている。もしそのようなことがこの地で起れば、諸君ができる限りこの町の会社の財産を守るよう努力することを、諸君の友人労働者たちは望んでおり、それに協力するであろう。諸君は暴力によらずに、あるいは会社の財産を破壊することを他人に許すことなしに、完全に和解をもたらせることができる。財産を破壊することは積極的に事態を救済せず、逆により良い時の回復をおくらせるであろう。正しく、堂々と、静かに、思慮深く行動し、諸君がそれを創り出すのを助け、諸君の技術、忍耐および精力にたいする永遠の記念碑である財産に、無関係な他人を干渉させるな。他人にして欲しいように行動し、決して性急に行動するな。もし会社が諸君たちにたいする要求において不正であるならば——かなりの程度われわれの町の将来の繁栄を形づくる鉄道施設の破壊を許すことなしに、できるだけ平和裡にそれを解決せよ。

市参事会は労働者に解散を命じ、200人の臨時警官が任命され、市長は酒場を全部閉鎖した。労働者側の団結は固く、駅、構内および会社の工場を占拠して、すべての貨物列車の運行を妨いだ。そして、かれらは会社の財産を汚損と破壊から守る協定を結んだ。

24日には鉄道以外の会社や、ウォバッシュ鉄道やグランド・ラピッツ・アンド・インディアナ鉄道の労働者の間に不穏な形勢が見え始めた。24日の夜にはフォート・ウェインの鉄道施設は武装した労働者たちによって、くまなく護衛された。鉄道労働者以外の浮浪者的酔っ払いや、酔っぱらった線路工夫たちが破壊行動を起そうとしたが、それらは何れも武装した労働者たちによって未然に防がれた。その間経営者側があえて貨物列車を運行させようとしなかった事情もあって、路線は整然と労働者たちに占拠され、フォート・ウェイン市の労働者たちはアルゲニー・シティの労働者たちと連絡を保って、かなり正確に旅客列車の運行を続けた。

25日の夜にはフォート・ウェインのストライキ参加労働者たちは秘密の会合を開き、従来の Superintendent, Master Mechanic および Master of Transportation に代る3人の役員を自らの間で選び、正式に路線の運行を掌握しようとした。しかし、上述の本来の役員たちはこのことを知り、警察の助けを得て守りを固めた。労働者側は、衝突の危険を冒してあえて事務室を占拠しようとはせず、従来通りの実質的な路線の掌握で満足した。

26日に、ピッツバーグのピッツバーグ・フォートウェイン・アンド・シカゴ鉄道の本部は、フォート・ウェインを含む各地から労働者代表を呼び集めて、労使交渉を始めた。同日、トレドで行われたウォバッシュ鉄道の労使交渉は、会社側が経営好転の際賃上げを約束したことから妥結した。ピッツバーグ・フォートウェイン・アンド・シカゴ鉄道の交渉は失敗に終り、ストは続けられるが、アルゲニー・シティへハートランフト州知事が軍隊とともに到着したことから、アルゲニー・シティの労働者が屈服するとともに、フォート・ウェインの労働者たちも意気阻喪し始め、月末には脱落者が出始め、8月2日にはスト参加者を解雇しないという条件の下でストは終結した。

インディアナ州の他の地域では、その南部を走るオハイオ・アンド・ミシシッピ鉄道に沿って、22日からシンシナティからセント・ルイスに向ってストが広がった。暴力事件は起らず、数日後他の地方の失敗の例を見てストは

終結した。23日にはヴァンダリア鉄道のテレ・ホーテなどでストが始まったが、これもストライキ参加者たちがスト中の禁酒を誓約するなど秩序あるストであった。22日には州都のインディアナポリスでストが始まるが、これらはいずれも軍隊出動の必要はなかった。

7. イリノイ州

シカゴでは、以前から共産主義者、社会主義者といわれる人々の運動が存在したので、ピッツバーグでの事件勃発以来かなりの反響が見られた。7月22日、23日ごろから多くの会合がもたれ始め、Working men's Partyを中心に、東部の労働者とともに起ち上って、餓死するよりは戦おうという趣旨の議論が聞かれた。¹⁾24日朝、ミシガン・セントラル鉄道で従来の賃金の回復の要求を経営者側が拒否したことからストが始まり、9時からイリノイ・セントラル鉄道でスイッチ係から静かにストが始まった。²⁾かれらは4人の代表を選んで master of transportation の J・タッカーに従来の賃金の回復を要求した。(スイッチ係たちは7月1日に自分たちだけが不公平に賃金を切り下げられたという不平をもっていた。)その要求が拒否されたので、ミシガン・セントラルとイリノイ・セントラルのスト参加労働者たちは、他の鉄道会社の従業員へのストの呼びかけに出かけた。まずバルティモア・アンド・オハイオ鉄道へ行ったが、そこではすぐにストが始まった。午後にはロック・アイランド鉄道、シカゴ・パーリントン・アンド・クインシー鉄道でも群集の勧誘に従ってストが始まり、貨物列車はほとんど停止状態となり、鉄道以外の諸工場へもストの勧誘が行われた。群集には、鉄道労働者以外に失業者など雑多な人々が加わり始め、³⁾鉄道以外の家畜置場、罐詰工場にたいしてもスト勧誘が行われ、強制的に操業を停止させられる工場も出てきた。(必ずしもストに参加しない工場も多かった。⁴⁾)そのうち大規模なものは、Excelsior Iron Works, National Boiler Works,

Greenbaum's Iron and Nail Works, C.D Dixon's. Wood Moulding Company, Chicago Die and Machine Works.

などであった。⁵⁾

これらの動きにたいして市の上層階層も徐々に緊張し始め、当局も警戒し始め、州軍は兵器廠に待機し、多数の臨時警官が誓約して武装した。ヒース市長は二度にわたって布告を出したが、その内容は東部の諸都市の事件を参照して、市民に協力を訴え、婦女子、子供を街路に出さないこと、酒場の開店と酒類の販売を午後6時までと規定したものであった。カラム・イリノイ州知事も布告を発し、人々に平和を守り、民主的手続で事態を解決すべきことを訴えた。一方、the Workingmen's Partyはヴァン・パッテンなどを中心に、8時間労働制と20パーセント昇給を目的とする全国的ストライキとそれを“永久的執行委員会”が指導すべきことを提案した。また、そのライバルであった the Chicago Labor League は、同じ日会合を開き、正金支払の再開の廃止と自由な銀の鑄造を提案した。25日には、群集は石と棍棒を武器に前日より活潑にスト勧誘を行い、町の商人たち⁶⁾は従業員を武装させ、在郷軍人クラブも自警団を組織し、銀行は閉鎖状態となり、警官隊と群集の間に各所でこぜり合いが起り始めた。鉄道ストも前日よりきびしくなり、シカゴ・アンド・アルトンやバーリントン鉄道ではストライキの拡がりを防ぐ意味もあって経営者側が列車の運行を止め、工場を閉鎖した。午後から群集と警官隊の衝突がさらに激しくなり、市長は新たに布告を出し、在郷軍人団や州軍は緊張して待機し、市の指導的商人たち数千人が午後3時半からタバナクルで集会を開き、市当局の方針を支持し、平和を守るためにかれらに協力することを決議した。市参事会が特別に召集され、市長に全権を委任する決議が行われた。(後述のように、このころ連邦軍の第一陣が到着するが、かれらは冷静で群集との間に事件は起らなかった。)

群集の勢力は、25,000から4,000とさまざまに計算されている⁷⁾。25日夜、六番街とホルステッド街のシカゴ・バーリントン・アンド・クィンシー鉄道機関

車庫で、群集による機関車の火落しと建物への投石が1時間ほど続いたとき、それを阻止するために警官隊が出動し、投石を受けて、約10分間群集に向けて射撃した。3人が倒れ、16人が負傷した。警官隊は退いたが、群集は憤激し、ホルステッド街で鉄道施設や市街電車を破壊したり、鉄砲店で銃やピストルを略奪し、増援された警官隊と衝突をくり返した。この日の午後と翌26日に西部インディアン討伐用のキング大佐指揮下の連邦軍が到着した。25日の夜、ヒース市長はイリノイ州知事を通じて正式に大統領に軍隊出動を要請し、直ちにシカゴのシェリダン將軍に州当局の命令下に入り、26日朝出動するよう命令が下った⁸⁾。州知事はその軍を市長に委ねた。その日の群集はほとんどが失業者たちで、雇用された労働者は少なく、とくに鉄道労働者はほとんど参加していなかった。群集は朝から電話線を切ったり、電車に投石したり、富裕な身なりの市民を脅迫したりして、何度か警官隊や州軍と衝突をくり返していたが、9時ごろ西十二番街のターナー・ホールで、大工と家具製作業労働者が集会を開いているところへ群集が集り始め、それを制圧に出かけた警官隊との間になかなか激しいなぐり合いが展開されたが⁹⁾、発砲事件には至らなかった。一方、前夜騒動のあったホルステッド陸橋付近で、少年を多く含む群集と警官隊とが衝突し、ここでは発砲が行われ、一時は群集は解散したが、11時ごろには全市から集った数が1万人に達し、60人の警官隊がその鎮圧に向ったが、とてもこれを制圧することはできず、半時間ほど待じして間隔をおいて発砲しているうちに、弾薬が付き、陸橋を渡って駅の方へ後退し始めた。群集は投石しながらこれを追跡し、警官隊はついに逃走し始めた。一行が十五番街まできて警官隊がきわめて危険な状況に陥ち入ったとき、騎馬警官隊が救援にかけつけ、今度は優勢になった警官隊が発砲と棍棒の使用によって狂暴に群集を制圧し、ホルステッド陸橋まで押しかえした。11時ごろ州軍が出動し、12時半には連邦軍が出動した。西部でインディアンとの戦いに慣れた、冷静な連邦軍の行進は群集を威圧し、何の抵抗も行われなかった。午後徐々に連邦軍が市街の各所に配置され、警官隊は平静になった市

街をパトロールして、多くの逮捕を行った。群集は小集団に別れ、もはや力で対抗しようとはしなかったが、警官隊とは各所で小競り合いを続けた。¹⁰⁾この騒動で死亡した人数は11人、致命傷3人、(以上全部群集側)負傷者は警官側8人、群集側35人であったが、群集側は死者や負傷者の多くをその場で運び去っており、その数は実際にはもっと大きいと考えられる。

26日夜¹¹⁾から27日にかけて、まだ発砲事件もあったが、軍隊を中心とする制圧下に¹²⁾事件数は減り始め逮捕活動が続けられ、27日夜には事態はほとんど平静になっていた。鉄道従業員たちは、他の地域でのストライキの失敗もあって、漸時会社側に屈服し、以前の賃金で仕事に復帰した。

シカゴ以外のイリノイ州では、ペオリアで鉄道施設の占拠が見られ、26日には警官隊と群集の衝突が見られたが、指導者たちの逮捕とともに事態は平静に向った。その他、デカトゥール、エフィンガム、ゲールズバーグ、ジョリエット、カーボンデールで小さな騒動が見られ、炭坑地のブレイドウッドでかなりの炭坑労働者のストライキが見られた。

- 註 1) 東部の諸事件の報せをうけて、シカゴでも同様の事態がおこることは一般に予想されており、アルバート・バーソンズらの the Workingmen's Party of the United States では最初から指導権を握ろうとする動きがあった。一方、経営者側も暴動の際の州軍の効力について議論を始めていた。シカゴ・アルトン・アンド・セントルイス鉄道のJ・C・マクマレンの表現によれば、「今は静かだけれども、夜までにはみなが鳥の群のように立ち上るだろう」という状態であった。Bruce, p. 235-238.
- 2) バーリントン鉄道、シカゴ・アルトン鉄道、シカゴ・ノースウェスタン鉄道などはストライキに備えて車輛の避難を始め、ノースウェスタン鉄道は賃金切り下げを撤回させた。Bruce, p. 239.
- 3) 午後群集の数は500人ほどであったが、ニューヨーク・タイムズによれば、鉄道労働者はそのうち10パーセントにも達せず、その大部分は14-20才の少年であった。Bruce, p. 239.
- 4) 逆に、ピッツバーグのような事態を恐れて、経営者側が工場を閉鎖した場合もあった。Bruce, p. 240.
- 5) 湖の船員たちもストに加わり、鉄道の停止とあいまって、仕事を中止せざるを得なかった企業もかなりあった。Bruce, p. 140.

- 6) the better class of citizens と呼ばれる人々で、the Trade of Board のメンバーは 1,800 人であったが、かれらは 24 日にはほとんど何の動きも示さなかった。ヒース市長も 24 日にはむしろ連邦軍の出動を押える態度をとり、陸軍省はオマハからの第九歩兵隊をロック・アイランドで待機させた。Bruce, p. 241。
- 7) その多くはみすばらしい服装のボヘミア、ポーランド、フランス、ドイツなどの移民で、the Workingmen's Party でさえ、平静を訴えるような雰囲気をもっていった。Bruce, p. 243。
- 8) このころ、警官隊、州軍、在郷軍人会、一般市民の自警団が一せいに組織を強化しつつあった。Bruce, p. 247~248。
- 9) この場合のように、警官隊が無抵抗の人々に棍棒で襲いかかるような事態が混乱の中で数多く見られた。Bruce, p. 249~250。
- 10) 前日までと同様、市内各所でストライキ勧誘と脅迫が続けられ、経営者に 1 日 2 ドルに賃上げする誓約書を書かせ、経営者側もそれに抱束力がないことを知っていて、喜んで署名するような光景が見られた。たとえば、マユームック工場も、群衆の襲撃は受けなかったが、経営者は自発的に操業を停止した。Bruce, p. 250~251。
- 11) この夜は放火の噂が広がり、心配されたが、実際にはおこらなかった。Bruce, p. 251。
- 12) 26 日午後には西部からの増援連邦軍が続々到着した。また自警団志願者も急速に増えた。Bruce, p. 251~252。

8. セント・ルイス

セント・ルイスの場合は、the Workingmen's Party の指導がかなり一貫して行われた場合であり、幸い David T. Burbank の *Reign of the Rabble, The St. Louis General Strike of 1877*. 1966 という詳細な研究が存在するので、それを主な材料として本章を記述するが、理論的にそれほど一貫しているとは言い難いが、当時の新聞の論調の影響を受けてバーバンクはセント・ルイスのゼネ・ストをそれより 6 年早いパリ・コミューンと比較するという立場から扱っている。1877 年のセント・ルイスは当時としては大生産都市であると同時に、商業中心地であり、その主要な産業は精粉業、肉加工業、鑄造業および機械工業、煙草加工業および鉄、鋼鉄業、その他鉛、錫、砂糖加工業などであった。そして、すでにミシシッピ河による蒸気船全盛時代か

ら、74年のイーズ鉄橋の建設などによって東西方向の鉄道の中心地に成長しており、その転換期においてシカゴとの主導権争いに敗れたとはいえ、1877年の人口は30万に達していた。市の中央部の繁華街を取り巻くように工場街とスラム街が広がり、北西の方向に高級住宅街があった。スラム街では、不潔と狭雑の中に大人口が小路に面した借家に群がり住んでいた。南北戦争後急成長を遂げてきたこの市の諸工業が生んだこのスラム街の状況は、73年以後の恐慌による失業の増大とともにさらに悪化し、76年から77年にかけての冬には2つの自治体による無料給食所が現われるほどであった。鉄道業においても他の地域の場合と同じように、操業の方法による合理化や数度の賃金切り下げによって経営難を切り抜けようとし、元来きびしかった競争がさらに深刻化していた。

7月22日の朝、当時のセント・ルイスの二大新聞、the Republicanとthe Globe-Democrat¹⁾は、バルティモアとピッツバーグの恐しいニュースを報道し、以後一週間全国およびこの地方のストライキのニュースが各紙の半分以上のスペースを埋めることになった。各紙は、最初はストライキを非難しながら労働者にたいしては同情的な態度を取った。この日、この市ではじめてのドイツ人市長であったオーヴァーストルツ氏をはじめ、市の上層部でこの市にもストライキの波が押し寄せることを予想した人はなかった。ところが、早くもこの日の夜、ミシシッピ河のイーズ鉄橋によってへだてられた鉄道中心地イースト・セント・ルイス²⁾で早くもストライキが生じた。そのトラウベル・ホールに、オハイオ・アンド・ミシシッピ鉄道、インディアナポリス・アンド・セント・ルイス鉄道、セント・ルイス・アンド・サウスイースタン鉄道、ヴァンダリア鉄道、ロックフォード・アンド・ロックアイランド鉄道、カイロ・ショート・ライン鉄道、カイロ・アンド・セント・ルイス鉄道、ユニオン・レイルウェイ・アンド・トランジット鉄道などの諸線の労働者代表が集り、執行委員会³⁾を選出した。この委員会は即刻真夜中以降の全貨物列車の運行停止（旅客列車および郵便輸送は無干渉）を決議した。

この際、従来からの唯一の組織である the Brotherhood of Locomotive Engineersが参加しておらず、(これは機関士たちが自分たちより下位の労働者の問題には干与しないという立場を従来からとっていたから当然であった。)一方、ミズーリ州側のセント・ルイスから the Workingmen's Party of the United States が代表ピーター・A・ロフグリーン、アルバート・カーリン、ヘンリー・F・アレンなどを応援に送っている⁴⁾ことが注目される。

ロフグリーンはドイツ語を話すデンマーク人で、1876年にアメリカへ移住したのちシカゴで弁護士になるが、73年にセント・ルイスへ移住し、Globe-Democrat 紙の書記となり、77年には the Workingmen's Party の英語を話す部門の会計係をしていた。カーリンは当時のかかなりの数のドイツ人移民のように、徴兵を避けて74年にアメリカへ移住してきたドイツ人で、77年当時 the Workingmen's Party の有給役員であった。2人は the Workingmen's Party で全国的に多数派であったドイツ語を話すグループと英語を話すグループを代表したが、ヘンリー・F・アレンはユートピア的社會改良主義者で、他に古風な平等主義的急進派でありながら過激な演説をするトマス・カーチスも有名であった。the Workingmen's Party は76年の7月にフィラデルフィアの会合で、それまでフェルディナンド・ラッサールとカール・マルクスとの理論斗争⁵⁾などを反映して原則的にあい入れないで争っていたいくつかのアメリカ人およびドイツ人の社會主義団体が結合したものであったが、セント・ルイスでも76年からこのストライキまでの一年間、目立つものではなかったが幼年労働の禁止、工場監察制度の樹立、州労働統計局の設置、その他の社会的立法を目標として運動していた。その理論はさらに鉄道、電信の国有化から、究極的には全産業、企業の国有化を目標としていた。ストライキが始まったころのセント・ルイスの黨員数は約1,000人で(全国で4,500人であった)ドイツ語、英語、フランス語、ボヘミア語の支部に分れ、約600人を擁したドイツ語支部が最大であった。⁶⁾

当時のセント・ルイス市の労働組合はみじめな状態であった。それらは過

去4年間の実りなき戦いの結果組合員数が激減しており、組合新聞一つなく、とてもゼネ・ストのできるような状態ではなかった。労働騎士団も西部ではまだ微々たる組合員すらもたない都市が多く、セント・ルイスでものちに指導者の1人になるジョセフ・N・グレンは当時数名の組合員の1人であった。

その中で一応の組織力を持っていたのは鉄鑄型工、鉄鋼労働者、家具労働者だけであり、(とくに家具労働組合には the Workingmen's Party のメンバーが多かった。)かれらの中心は、セント・ルイス市南部のカロンデレート工場地域であった。

21日の夜にはカーリン、ロフグリーンらが参加して会合が開かれてストライキの議論がなされ、セント・ルイス・アンド・サウスイースタン鉄道の管財人の一人ジェームズ・H・ウィルソン⁷⁾は不穏な状況の兆があるとワシントンの内務長官カール・シュルツに電報を打った。

22日には新聞は前日のピッツバーグのユニオン・デポット駅炎上などの騒乱事件を伝え、リパブリカン紙はセント・ルイスにもその恐れがあるとして、在郷軍人の組織化や会合の禁止を訴えた。各地で州軍の頼りなさが伝えられる中で、前述のジェームズ・H・ウィルソンの示唆に従って、陸軍長官はカンザス州レブンワース堡のミズリー軍管区のポーブ将軍にセント・ルイスへ出動可能な軍隊を派遣することを命令した。

イースト・セント・ルイスではストライキ参加者たちが会社側に要求を拒絶されてリレイ・デポット駅を占領して自分たちの本部とし、その周辺のすべての酒場を閉鎖するなど厳格な規律の下にストライキを続けた。⁸⁾会社側は列車運行再開の若干の努力をするが、労働者の阻止にあってあきらめ、事態は平静であった。23日午後には貨物列車の全面停止を命じる General Order No. 1 が執行委員会によって出され、シカゴのドラモンド判事がイリノイ州南部地区の連邦保安官に、連邦法廷の統制下にある破産鉄道会社の列車運行を阻害するものを確認せよと命令をだし、ジェームズ・H・ウィルソンが連邦地方判事グレンシャムと会談するなど情勢は緊迫し始めたが、その時点

においてはイースト・セント・ルイスのボウマン市長の下には数えるほどの警官隊しかいなかったし、ストライキも平静であったし、市長自身が労働者の票で選ばれていた経緯もあって騒乱状態は起りそうになかった。市長はむしろ調停者になろうとし、これを機に各鉄道会社側が個々に自社の従業員と交渉しようとしたが、執行委員会がこれを拒絶したことからそれは失敗に終わった。

労働者たちは鉄橋会社と協議して鉄橋の安全な輸送を手配し、イースト・セント・ルイスのリレイ・デポットとセント・ルイスのユニオン・デポット間の電信連絡も支配した⁹⁾。セント・ルイス側では不安な噂が流れ、オーヴァーストルツ市長は調停者的な役割を果そうとする態度を見せるが、大部分の鉄道会社は同意しようとはせず、警察は勢力の集中と武装化を始めたがその日は何も起らなかった。この日、各鉄道会社のとった態度とそれをめぐる情勢は混乱していた。ミズリー・パシフィック鉄道は約25パーセントの賃上げに同意し、ストライキ回避に成功したと発表した¹⁰⁾。しかし、鉄道労働者執行委員会はこれを認めないと発表した。カロンデレートに通じるアイアン・マウンテン鉄道では、この年の1月の10パーセントの賃下げを撤回するよう会社側へ申し込みがなされた。セント・ルイスとイースト・セント・ルイス間の輸送を独占していたユニオン・レイルウェイ・アンド・トランジット会社は予定されていた賃金切り下げを撤回した。しかし、23日の夕方セント・ルイスのユニオン・デポットのスイッチ係がストライキに入った。

セント・ルイスのストライキの展開は鉄道会社に限らなかった。ミシシッピ河以西の貨物輸送は、他の地域のストライキによって混乱はしていたが、完全に停止したわけではなかった。23日の夕方カロンデレートで、鉄道労働者と前年に激しいストライキを経験したヴァルカン・アイアン・ワークスの従業員が集会を開いた。これが鉄道ストライキからゼネ・ストへの途を開いたようである。一方、その夕方にはセント・ルイスの中心部、十二番街のルーカス・マーケットでも the Workingmen's Party による集会が開かれた。それまでさほどの動員力のなかった the Workingmen's Party が、その際

4～5,000人の集会（人々はつねに流動していたので総数はもっと大きい）を開くことができたことは、市の各層にとって大きな驚きであった。¹¹⁾ ロフグリーンを議長として集会が始められたが、聴衆の数が多過ぎて三ヶ所で演説が行われた。前述のアルバート・カーリン、トマス・カーティス、ジョセフ・N・グレンらが演説し、最後に5人委員会が選ばれたが、それはロフグリーン、カーティスの他、黒人のウィルソン、ジェームズ・マッカーシー、ジェームズ・E・コープであった。このうちジェームズ・コープは第一インターナショナル（72年にニューヨークへ本部を移し、76年にフィラデルフィアの大会で the Workingmen's Party に改組された）の創設に参加した人物であり、アルバート・カーリンは76年のフィラデルフィア大会の代議員であった。

以上のような集会の外にも東部の各地域の騒動の報せ、とくにペンシルヴァニア州のレディングのそれ、西のサン・フランシスコの反中国人暴動の報せがセント・ルイス市の各層を緊張させ、州軍、警官隊はフォア・コートという建物に集結し、貧民街では異様な興奮状態が拡がり始めた。

24日の新聞は中西部がストライキに巻きこまれたことを中心に各地の情報を伝えたが、ミズーリ州においてもカンザス・シティ、セダリア、ハンニバルなどでストライキが始まっていることが伝えられた。セント・ルイスの状況は、イースト・セント・ルイスではあい変わらず平静なストライキが続いており、セント・ルイスではイリノイ州からの石炭が途絶したので影響は受けてはいたが、大部分の企業は操業を続けており、ゼネ・ストの声もまだ聞かれなかった。しかし、シカゴ・トリビューン紙やグローブ・デモクラット紙は昨夜の“インターナショナリストたち”の集会をとり上げ、種々の陰謀があるかのように記述した。

イースト・セント・ルイスの執行委員会は、General Order No. 2 を出し、労働者の要求は“すべてかあるいは無”であるべきであると、執行委員会を通じる以外にはどの鉄道も妥結すべきではないとした。一方、旅客輸

送についての執行委員会内部での混乱から、ヴァンダリア鉄道の郵便急行列車が停止させられる事件が生じ、いくつかの鉄道で旅客輸送が停止した。¹²⁾ 前述のセント・ルイス・アンド・サウスイースタン鉄道の管財人ジェームズ・H・ウィルソンは、この度もこのことをシュルツ内務長官に報せた。またイースト・セント・ルイスでは鉄道以外にもストライキが広がる傾向が見え始め、罐詰工場でストライキが始まり、イースト・セント・ルイス周辺の炭坑労働者もその傾向を見せ始め、イースト・セント・ルイス全体がゼネ・ストの様相を呈し始めた。¹³⁾ the Workingmen's Party のターナー・ホルの本部へもストライキの指導の要請がき始め、それに応じて各工場を巡回した結果は驚くべきものであった。桶製造業でストライキが始まり、ガス工場でも始まった。ディスパッチ紙では新聞配達少年たちがストライキを始め、船員や技師たちのストライキがあい次いで起った。

セント・ルイス市でも不穏な雰囲気がかひひしと感じられ始めた。あらゆる社会不安の噂が聞かれ始め、不時の事態に備えて食糧の買い占めや防火の準備がなされ始めた。オーヴァーストルツ市長はわづか300人の警官隊と、南北戦争後75年までにほとんど解散されてしまっ、77年に新しく組織された州軍 the National Guard of Missouriに頼ることができるだけであった。朝から市長室に市の有力者たちが集って対策を協議したが、確かな結論は生れなかったようである。午後おそく新しいユニオン・デポット駅に数千の群集が集り始めた。また、イースト・セント・ルイスからきた労働者のいくつかの集団が“すべてか無か”の方針を喧伝して廻り、ゼネ・ストの傾向が生れ始めた。すでにヘイズ大統領はシンシナティとセント・ルイスへの派兵を考慮していたが、オーヴァーストルツ市長の政治的立場から見て派兵要請がなされない可能性が大きく、派兵要請がない場合の連邦軍出動の根拠が閣議で議論されていた。¹⁴⁾ そして午後6時には、ユニオン・デポットへ州知事の要請なしに第23歩兵聯隊の6ヶ中隊約400人がジェファーソン・C・デヴィス大佐の指揮の下に到着し、2マイル南の連邦兵器廠に駐屯した。それ

は“単に政府および公的財産を守るために”出動したのであって、“ストライキを鎮圧したり、列車を運行させるために”出動したのではなく、“陸軍省の命令にのみ従うよう義務づけられ”たものであった。¹⁵⁾

朝の市長官邸での会合の後を受けて、夕方にフォア・コートで市当局側の会合が開かれ、1人の判事と5人の裁判官からなる A Committee of Public Safety が結成された。一方、the Workingmen's Party もターナー・ホールで、それ以後主導権を握ることになった「執行委員会¹⁶⁾」を選出した。¹⁷⁾ その「執行委員会」が24日午後労働者の窮状と連邦軍の出動を要請しないことをオーヴァストルツ市長に申し入れたとき、市長が労働者にたいする“同情”を表明し、連邦軍に出動しないよう要請することは自分の権限外であるが、現在まで要請はしていないと答えたことが、指導者たちに市長は“中立”であるという印象を与え、かれらを勇気づけたようである。一方、その夜ルーカス・マーケットで別の会合が予告され、最初に集った主として鋳型工と機械工のデモがそれ以前とは異った雰囲気を作りだし、約1万人の集会にふくれ上り、数千丁の武器を労働者側が利用できることや、ミズーリ・パシフィック鉄道が妥協したのは連邦軍を運搬するための欺瞞であったことや、黒人労働者とともに戦うことなどが話題となり、最後にH・F・アレンが「執行委員会」の名のもとに8時間労働制と幼年労働の禁止を2つの主要な目的としてゼネ・ストを要求する決議を紹介した。この日の朝から各地からの騒乱状況の報せに溢れていたワシントンは、中でもセント・ルイスの状況の深刻さに留意し、さらに6ヶ中隊の連邦軍を増援することを決定した。また、ルーカス・マーケットの集会の結果は Committee of Public Safety を極度に狼狽させ、それは陸軍長官に1万挺のライフル銃、2千挺のピストルと1砲兵中隊を要請した。(このかげでは、前述のジェームズ・H・ウィルソンがシカゴの巡回判事ドラモンドやインディアナポリスのグレシャム判事と連絡して、連邦裁判所の権限下にある破産鉄道を“公的資産”として、それを連邦政府が保護することの合法性を理論化していた。)ワシントンのマククレ

アリゾナ陸軍長官は直ちに1万挺のライフル銃を送るとオーヴァーストルツ市長に打電したが、その後でその10分の1すら調達が可能であるという部下の報告に接してそれを取り消すなどの混乱ぶりを示した。その夜、セント・ルイスのイギリス領事が本国に報告したところによれば、「市は実質的に暴徒の手中にあり、住民たちはピッツバーグ市から刻々入るニュースの恐怖を上廻る爆発を今か今かと恐れている。……不満な人々の群はそれに対抗する勢力のないままあらゆる街路に溢れ、夜毎の大衆集会はもっとも公的な場所で開催され、何千というもっとも無知で墮落した人々が、演説者たちの煽動的な演説によって暴動的にならされている」という状態であった。

25日の水曜日はストライキが全国的にもっとも激しかったとされる日で、カンザス・シティ、シカゴ・インディアナポリス、テレ・ホウト、コロンバス、シンシナティ、ルイヴィル、ピッツバーグ、バルティモアの諸都市からストライキが報告された。ピッツバーグでは騒乱状態は治ったが軍隊が充満している状態で、セント・ルイスを含め西部諸都市が一せいに乱れ始めたため、レパブリカン紙の見出しによれば、“大西洋から太平洋まで、あらゆる方面で”騒乱状態であった。

セント・ルイス市の一部の新聞は、オーヴァーストルツ市長の受身的な政策を騒乱を避ける最良の方法としてまだ賞讃し、騒動はまず起らないであろうとしていた。これは南北戦争以来、市の人口の大きな部分を占めてきたドイツ移民たちの平常の規律正しい、性急さを嫌う生活態度にたいする信頼にもとづく希望的観測であったが、実際には先夜以来事態は悪化しつつあった。24日夜のルーカス・マーケット集会は市の指導者たちに、“インターナショナルナリストたち”があたらしい“コミュニオン”を宣言していると信じさせた。市の商業の中心であった Merchant's Exchange は従業員たちが州軍に参加できるように閉鎖され、酒場はすべて休業させられた。市政府の事務はほとんど停止され、市政の中心は Committee of Public Safety の本部となったフォア・コートに集められた。自警団の組織化、州軍の増強が進められ、

ミズーリ州知事ジョン・S・フェルプスはジェファーソン・シティの州兵器庫から小銃と大砲をセント・ルイスに運搬することを命じた。

東部向けの貨物輸送は労働者によって全部停止され、一部の旅客列車と郵便列車だけが運行されていたが、これも鉄道会社側から大部分停止された。その理由は、労働者の移動を阻止することによってストライキの沿線への拡がりを阻止するためと、郵便輸送の停止によって連邦政府による干渉の道を開き、一般大衆の同情を得るためであった。イリノイ・セントラル鉄道もイリノイ州のエフィンガム、マトゥーン、デカトゥール、カーボンデールの各所で中断されていた。ユニオン・デポット駅には2~3,000人の群集が集っていた。朝9時からルーカス・マーケットでの集会が予定されていたがそれは開かれず¹⁸⁾、ターナー・ホールに黒人を多くふくむ群集が集ったが、ターナー・ホールの本部は12時半に集会を開き、その後ストライキ勧告のデモを行うというピラを配った。各産業で要求賃金額が議論され、「執行委員会」は、ストライキを勧告する工場や企業のリストを作った。ルーカス・マーケットにはワイヤー工場の従業員や鉄道労働者を中心とする群集が集ったが、「執行委員会」は集会が2時に延期されること、秩序が守られるべきこと¹⁹⁾、16才以下の少年は参加が許されないことを発表した。集会では演説がなされた²⁰⁾あと、約5,000人のデモ隊がルーカス・マーケットからロカスト街へブラス・バンドを先頭²¹⁾に4列縦隊で行進を始めた。保安官たちが周囲を規制したこともあったが、かなり秩序正しい行進が続いた。そして、行進の通過する両側の工場は労働者委員たちの訪問を受けたり、前もって知らされていたりで次々と操業を停止して、従業員たちは行進の列に参加した²²⁾。また別のデモ隊は市の西部のシェルテンハム地区へ行き、そこの熔解工場や精練工場、煉瓦工場や陶器工場をストライキに参加させた。また市の南部のカロンデレートでは、一隊はイースト・セント・ルイスの鉄道労働者の激励に向い、またカロンデレート自体の集会では“パンか血か”といった演説が続いたが、夕方のターナー・ビルディングでの集会は、元来それが州軍増強のために開か

れたものであったが、最初から the Workingmen's Party の活動家が議長に選ばれるなど労働者の集会となり、それは秩序を守るための独自の執行委員会を選ぶ方向へ進み、オーヴァーストルツ市長に酒場を閉鎖するよう要求したり、労働者からなる独自の「臨時警察」を任命することを要求する方向へ進んだ。同じ傾向がセント・ルイスの「執行委員会」でも見られ、この日の夕方カーリンなどの執行委員はオーヴァーストルツ市長と会見し、暴力を抑圧するため数百人の労働者を市長に委ねることを提案した。市長は感謝してその提案を受け入れ、必要な場合にはそれを利用すると答えた。

イースト・セント・ルイスでは婦人の支援デモがリレー・デポット駅へ向って行われたりするが、夜のルーカス・マーケットでの集会はこのストライキ中の最大のものとなった。ある新聞の1万人以上という数字は妥当なものと考えられ、²³⁾ ロフグリーン議長らは秩序を訴え、トマス・カーチスが要求を貫徹するためには目標は連邦政府であることを強調し、全国法銀行の特許の廃止、公共事業計画、8時間労働制を要求する趣旨の演説をし、その後翌日のデモの計画が議論された。トマス・カーチスのこの全国的問題についての議論だけがその夜の執行委員会の提案であり、(カーチスがどの程度執行委員会の意見を代表したかは疑問である。)セント・ルイスの地域的問題、各労働組合の要求についての執行委員会の態度は触れられなかった。このことは、イースト・セント・ルイスの執行委員会が賃金切り下げの撤廃という主要目標を掲げていたのと対称的で、前にも触れたように両者の間の意見の相違はときに表面化したが、そしてこの日も両者の見解の統一の努力が行われたようであるが、セント・ルイスの盛り上りが「執行委員」の予想を上廻り、暴力を抑圧しようという努力と、「執行委員会」内部の弱さ(前述のように、恐慌が始まって以来の重なる労働組合の敗北のため、組合組織はこの時点で急速に再編されたものであった)がこのような結果を招いたと考えられる。

全国的にこの日はストライキがもっとも激しかった日で、あらゆる都市が

ら報告が大統領の手許にとどいたが、その中で不穏なものは、サン・フランシスコ、ルイヴィル、シカゴ、セント・ルイスのものであった。セント・ルイスはまだ騒乱は起っていないが、市内に軍隊が少ないこともあってワシントンはとくに憂慮し、この日ワシントンとセント・ルイスとレベンワース壘の間の電話は忙しく、レベンワース壘のポーブ將軍のもとから増援軍がセント・ルイスへ向った。

26日の木曜日にはバルティモア、フィラデルフィア、ニューヨーク、オルバニー、バッファローは平静になっていたが、ピッツバーグへの路線を開く作戦が展開されていたし、シンシナティ、クリーヴランドなどはストライキ状態で、シカゴはクライマックスを迎えていた。セント・ルイスの朝の新聞は、市が「注目すべき小康状態」にあることを伝えたが「執行委員会」が、Committee of Public Safetyの戦闘準備と労働者をふくむ群集の衝動的な動きの板ばさみになり、過去3日間の労働者の自由な行動が永続できないものであることはだんだん明らかになりつつあった。その前日およびこの26日の時点で「執行委員会」がなすべきであったことは、市内の多くの労働組合を統一して中央集権的な責任をもつ指導権を握り、一方において労働者の怒りを爆発させないで、統制し、他方において経営者たちおよび市当局の戦争準備に対抗することであった。ところが、不幸にも情勢はあまりにも複雑であった。過去の労働争議を生き残ってきた組合はほとんどが熟練職人たちのものであり、かれらは本来非熟練労働者や半熟練労働者とは一線を画しており、とくに the Workingmen's Party と「執行委員会」に疑念を抱いていた。the Workingmen's Party 内部にはラッサール派がいて、組合中心主義をある程度軽蔑していた。黒人の大量参加は明らかに多くの労働者を混乱させた。ドイツ移民労働者とアイルランド移民労働者の間には従来からの敵意があった。そして、これまでの「執行委員会」の本拠であったターナー・ホールTurner Hallの所有者たちが危惧を抱いたことから、ビドル・ストリートのシュラー・ホールへ本部を移転した²⁴⁾ことも少なからず影響を与えた。

以上のような背景のもとで、しかも前に見たような「執行委員会」の判然としない態度が継続して、26日に「執行委員会」がオーヴァーストルツ市長に要求した内容は、さし当っての労働者の食糧不足を解決してほしい、しからばわれわれは市の秩序回復に協力しようというものとなった。

一方、以前から進んでいたフォア・コートに本部をもつ Committee of the Public Safety 側の計画は、市長の優柔不断さを責める新聞の論調などを背景にますます決然たる動きとなり、南北戦争で活躍した前將軍たちが増強されつつある州軍のそれぞれの部署の指揮をとり、野戦病院まで設営されつつあった。市長も州知事も布告を出してできるだけ暴徒に加わらないこと、工場や事業に不当に干渉しないことを訴え、フェルプス州知事はこの日の朝セント・ルイスに到着して市長や軍の指揮者たちと協議し始めた。かれがもっとも関心をもったのは州軍の武装に必要な武器で、この日セント・ルイス市のすべての銃砲店がその在庫の武器を市当局に提供した。またジェフ・ソーン・シティの州兵器庫からも、1,500 挺の銃と弾薬がセント・ルイスへ運ばれた。²⁵⁾

当局側にとってもう一つの心配はユニオン・デポット駅であった。その日カンザス州から合せて3ヶ中隊の連邦軍が到着して近くの連邦兵器庫で待機したが、その日はデポットでは何も起らなかった。その日の列車の運行状況は貨車はまったく不通、若干の鉄道で郵便車のみが運行されていたが、ほとんどの鉄道では全部が運休状態であった。25日夜のルーカス・マーケット集会でこの日のデモが報告されたにも拘らず、この日「執行委員会」は“もっとわれわれの組織が完成しなければ秩序が守れない”として実際には行なおうとしなかった。街路には暴徒と警官隊の間の衝突を期待する群集が溢れたが、警官隊は本拠のフォア・コート周辺でしか活動せず、数十人を逮捕したに止まった。ルーカス・マーケットでは自然発生的に、しかし秩序正しくデモが発生して約5,000人が参加し、前日は商業中心地の西および南西方面へ行われたのにたいし、この日は北方および北西方面へ行われた。ストライキ

勧誘は成功で、ストライキに参加した工場数は60に達した。²⁶⁾ カロンデレートでは大工場はほとんどストライキに入り、Vulcan Iron Works の1,000人の労働者が集会を開いて賃金要求額を論じた。また、「執行委員会」の努力によって20人ほどの労働者が臨時警官に任命されて秩序の維持に当たった。

以上のような状況にも拘らず、セント・ルイスではストライキを粉砕するために巨大な勢力が準備されつつあることは誰の目にも感じられた。夕方にはヴェランダ・ビルディングで商人たちの会合が開かれ、Committee of Public Safety を応援することが決議された。基金募集が行われて2万ドルが集められ、1,000人の元軍人が登録された。Committee of Public Safety とその同盟団体はきたるべき戦いの準備を着々と進めつつあった。

26日の夜、最後のものとなるルーカス・マーケットの集会が行われたが、「執行委員会」が不在で、シュラー・ホールまでデモが行われる²⁷⁾間に参加人員数は減ってしまった。そして従来から存在した“武力には武力で”の議論が一部で行われ、Committee of Public Safety を中心とする勢力の結集に武力で対抗しようという議論もなされたが、それはこのような議論を誇大に報告することによって、反労働者勢力の実力行使を促そうという意図をもった一部の新聞が誇張したもので、少なくとも the Workingmen's Party は武装叛乱を喧伝はしなかった。また「執行委員会」内部でこの問題をめぐって分裂や議論が現われたという資料は全くない。むしろ、この夜の段階で「執行委員会」はそのもっとも大きな力の源泉であった大衆集会とすら接触を失った、もしくは放棄したようである。この26日というもっとも重要な時点で「執行委員会」は混乱し、大衆指導を放棄したというべきであろう。²⁸⁾

以上のような要因から生じた26日夜の集会の無力さは、群集の暴力の危険が去りつつあるという一般的印象を与えた。

27日には、東部、シカゴを始め、全国的にストライキは鎮まりつつあったが、セント・ルイスではこれまで大衆運動を指導しているかに見えた the Workingmen's Party を中心とする「執行委員会」の混乱と、相対的に力

を蓄えてきた反労働者勢力がようやく自信をもってきたことから、ようやく騒乱状態が始まった。まず朝から新聞が、セント・ルイスがパリ・コミュニケーションのときのパリと似ていると書き立てる中で、西部から増援連邦軍が到着し、ジェファーソン・シティから銃器が到着し、ワシントンでは軍出動が論議されていた。レベンワース壘のホープ将軍は、行動を起すのに十分な軍が準備されたとワシントンに報告した。10時ごろにはこれまで不通であったウォッシュ鉄道ワッシュの旅客列車が突然東から到着して、小ぜり合いが生じた。各所で警察の保護のもとにストライキが解除され始めた。一方「執行委員会」は朝から前日までのようにストライキを強化する手段をとり、これは幾分成功していたが、依然として平和裡に事態を收拾すべく、流血を避けて、各産業ごとに交渉して妥結にいたるようなコースを考え、不安を感じてシュラー・ホールに集った群集に解散を命じる有様であった。²⁹⁾しかし、群集は集り続け、「執行委員会」批判演説も始まった。「執行委員会」と市当局が交渉中という噂もとび、³⁰⁾シュラー・ホール周辺の群集は混乱し、ストライキ中の各工場の労働者も動揺し始めた。

このような情勢の中で、反労働者勢力の攻勢の可能性を考えると、イースト・セント・ルイスやカロンデレートのようにほとんど完全に労働者が掌握している地域と、シュラー・ホールをはじめそれ以外の地域の間に異った性格の情勢が見られ始めた。労働者攻撃の準備が進められているフォア・コート内部には上層市民層が集り、その外部を敵意をもった群集がとりまいてそれを牽制していた。フォア・コート内部でも朝から論じられている攻撃開始にスミス将軍とマルマデューク将軍が反対する³¹⁾という混乱が見られたが、午後3時ごろジョン・D・ステューヴンソン将軍と市長の指揮下に州軍と警官隊（連邦軍はこれに加わらなかった）のシュラー・ホールに向う行進が始まった。

「執行委員会」側では少くとも組織立った対抗行動はなかった。³²⁾シュラー・ホールに到着すると、州軍が砲2門とともに展開した前で騎馬警官隊が群

集をけ散らし、徒歩警官隊がホールに入って、居合わせた人々をかなり容易に逮捕してしまった³³⁾。しかし、主力指導者たちは逮捕されず、しかも奇妙なことにアルバート・カーリンとこれも執行委員であったウィリアム・フィッシャーの2人は自らフォア・コートに出かけて“現存する労資間の紛争を平和裡に解決するために”市長に面会を申し込み、市長も以前の経緯から困った立場におかれたようであるが、結局2人はその場で逮捕された³⁴⁾。一方、残った「執行委員会」はその日の夜、ルーカス・マーケットとサウス・サイドとノース・サイドの3ヶ所で集会を計画して、それなりに“平和裡の”運動続行を意図していたらしいが、これらは人数も少なく、警官隊の出動によって簡単にけ散らされてしまった。労働者と群集は不安な状態におかれ、「執行委員会」が存続しているのかどうかもわからない状況になった。市の中心部からかなり離れたカロンデレートではストライキは続行中であったが、「カロンデレート執行委員会」が経営者の一部を含んで構成されていたため、実質的にそれは解散してしまった。そして夜には州軍がこの地にも派遣され、徐々にミズーリ河以西ではストライキは解体に向った。フェルプス・ミズーリ州知事のイリノイ州知事への報告によれば、28日にはセント・ルイスではほとんどの鉄道が運行を再開して、軍隊が必要なのはイースト・セント・ルイスであった。

イースト・セント・ルイスでは労働者が実権を握り、自らの警察を任命し、厳格な規律のもとにストライキを続行していた。かれらはシュラー・ホール襲撃の報を受けて驚くが、その前から「鉄道労働者執行委員会」は、敗北の可能性に直面して妥協派と徹底抗戦派に分れて激論を交していた。その結果、委員の交替も行われるが、一般にセント・ルイス側の指導者たちが有名人であったのにたいし、イースト・セント・ルイス側は無名の労働者たちであり、また前者が半政治的性格の運動であったのにたいし、後者は鉄道労働者の純粋な賃金斗争が主流であったことも特徴的であった。そのためイースト・セント・ルイスの労働者たちは、連邦軍出動の論拠を与えることを恐れて州境

を超えてセント・ルイスにまで活動を広めることさえ控えてきたのであったが、27日の夜には連邦政府はイースト・セント・ルイス干渉の決意を固めつつあった。その直接的背景はそこに集結したイリノイ州軍が非力であったことであったが、法的論拠はイースト・セント・ルイスで運行を中止させられている鉄道のうちのいくつかが破産中で、連邦法廷の管轄下にあった点であり、さらに運行中止がもう数日続けば、輸送中断から生じる原料（とくに石炭）不足のためセント・ルイスの全産業が操業不可能になり、新たな騒動が生じる可能性が大きかったという事情があった。かかる情勢のもとで、セント・ルイスの連邦地方判事サミュエル・トリートとシカゴのドラモンド判事が活躍し、夜にはセント・ルイスの連邦保安官レフティングウェルが大統領に軍の出動を要請した。一方、労働者側もきたるべき衝突を予想して、一部には銃砲店に押し入って武装を始めるものもあった。

29日朝、連邦軍はまずイーズ鉄橋を占領し、この鉄橋と船によってイースト・セント・ルイスに進んだ。軍がリレー・デポットに到着したとき、労働者たちは無抵抗で逃げたが、かれらはストライキを断念したのではなく、夜になっても貨物封鎖は破れなかった。

28日のセント・ルイス市は平静であったが、州軍が街路を行進し、警察や州軍の厳戒体制は続いた。ユニオン・デポットは平静で西方への運行は再開されたが、東方への貨物輸送は依然として閉鎖されていた。輸送中断のため市内の石炭が欠乏し始めていた事情もあって、この日操業をしなかった工場は多かった。カロンデレートでも警官と州軍が制圧し、「カロンデレート執行委員会」のうち実業家を除く27人が逮捕された。かくて、この日の夕方にはポーブ將軍は市長が完全に市の統制権をとり戻したと報告することができた。

29日にはイースト・セント・ルイスの鉄道労働者は貨物輸送中止の最後の努力を行ったが、多数の労働者が逮捕され、このころになってヴァンダリア鉄道とインディアナポリス・アンド・セント・ルイス鉄道の機関士たちがス

トライキを始めたが、連邦軍の制圧下では大勢を動かすことはできなかった。³⁵⁾ セント・ルイスでは警戒体制が徐々に解かれ始め、31日には3,000名にまで増えた州軍が正式に解散された。

その後8月初旬に指導的労働者たちの逮捕と裁判が行われた。新聞がこのような事態の再発を恐れて厳重な処罰を主張したにも拘らず、現実の暴力行為が少なかったこともあってそれは良い加減なもので、たとえばイースト・セント・ルイスの場合は20人足らずが起訴されたが、鉄道労働者の力を恐れる鉄道会社の政策も原因して9月3日に各人500ドルの保釈金で釈放された。セント・ルイス側でも検事は8月10日に *nolle prosequi* (訴訟中止の同意) に入ると宣言し、執行委員たちは釈放された。³⁶⁾ 他のほとんどの地域の場合と同じように労働者側の敗北の形でストライキは終わったが、指導者にたいする処罰は他の地域と比べて軽微なものであった。³⁷⁾

註 1) この他、the Westliche Post 紙と the Anzeigen des Westens がドイツ語の二大新聞であった。

2) イースト・セント・ルイスは人口9,000の鉄道中心地で、事実上東部の鉄道組織と西部の鉄道組織を結ぶ連結点であり、鉄道会社にとっても、ストライキ参加者側にとっても戦略的要地であった。

3) これは今後多くできる執行委員会の一つであることに注意されたい。選出方法は各鉄道から3人の代表が選ばれた。

4) かれらとともに約200人の党のメンバーたちが応援に行った。Martin, p.396。

5) 一般にラッサール派は政治活動を重視したが、マルクス派は労働組合運動を重視し、軽卒な政治活動を警戒した。

cf. W. Z. Foster, *History of the Three Internationals*, 1955, Chap.12。

6) 内訳はドイツ語支部600人、英語支部200人、ボヘミア語支部75人、フランス語支部50人であった。Bruce, p.254。

7) セント・ルイス・アンド・サウスイースタン鉄道は再建途上にあり、もしストライキが起ればかれにはひじょうな打撃が予想された。Bruce, p.255。

8) イースト・セント・ルイスのボウマン市長はかつてオーストリア、フランスで革命運動の経験のある人物で、労働者の代表としての市長の性格をもっており、ストライキ参加労働者を臨時警官に採用したりした。Bruce, p.257。

9) 労働者たちは家畜の飼料の運送など、緊急な若干の点で会社側の操業を認め続けた。Martin, p.398。

10) これはオーヴァーストルツ市長の調停を受け入れたものであった。Bruce, p.258。

- 11) Bruceは、このとき the Workingmen's Party がセント・ルイスのストライキの指導勢力となったとしている。Bruce, p.258。
- 12) ここで労働者と乗客の間で若干の争いが生じた。Martin, p.400。
- 13) セント・ルイス・カンザス・シティ・アンド・ノーザン鉄道のように、ミズーリ・パシフィック鉄道の例にならって賃金切り下げ撤回によってストライキを避けようとするものもあったが、労働者側は問題にしなかった。Bruce, p.259。
- 14) 前述のウィルソンはオーヴァーストッツ市長に弾圧の意志がないから連邦保安官は何もできない、連邦軍の出動が必要であると打電していた。Bruce, p.258。
- 15) ウィルソンはこれではとても鉄道開通はできない、少なくとも1,500人の連邦軍を出動させよとワシントンに打電した。Bruce, p.260。
- 16) これは以前、イースト・セント・ルイスで鉄道労働者の中で選ばれ、今後も活動を続ける「執行委員会」とは別のものであり、今後出てくる「執行委員会」はセント・ルイスのものを指す。また、のちにカロンデレートでも執行委員会が生れる。
- 17) 著名な社会主義的歴史家、Morris Hillquitは選ばれた委員たちはそこに居合わせた人々であったとしているが、そのとき選ばれたアレン、カーリン、ロフグリーンらはもっとも連続して活動していた人々であるとBruceもBurbankも反論している。Bruce, p.260, Burbank, p.56。
- 18) このころは混乱が支配していた。Bruce, p.274。
- 19) この点、アルバート・カーリンはのちに集った群集に浮浪者や黒人が多かったことが意外であったこと、そのため秩序を守るためできるだけのことをしたとして、「執行委員会」の責任を回避する発言をした。
- 20) このとき、イースト・セント・ルイスの鉄道労働者の代表として、ハリー・イーストマンが、“セント・ルイスの労働者はイースト・セント・ルイスに干渉するな。諸君らは自分の地区に帰り、自分の組合を組織せよ。ここへ集ってきて集団で興奮をかき立てるようなことはするな”という趣旨の演説をしたことは、当時の執行委員会内部の意見の分裂を反映するとともに、のちに見るようにセント・ルイス側とイースト・セント・ルイス側の相違を見る点で注目すべきである。
- 21) 曲はマルセイエーズであった。
- 22) 大部分の工場では抵抗はなかったが、かなりの強制と暴力があった場合もあった。それらの工場は砂糖精製工場、機械工場、製粉工場、熔鉱炉、汽船会社などほとんどすべての分野に及んだ。Martin, pp.408~411。
- 23) これをわずか800人と報道した新聞もあり、このストライキに関するセント・ルイスの諸新聞の不正確な報道は、それらがそれぞれの政治的立場をもっているにしてもひどいものであった。
- 24) これは水曜日の夜から木曜日の朝の間に行われた。
- 25) この武器輸送が無事ユニオン・デポット駅を通過して行われたことは、まずユ

- ニオン・デポット駅がセント・ルイスの執行委員会ではなく、イースト・セント・ルイスの執行委員会の管轄下にあったこと、ついで後述されるように、イースト・セント・ルイス執行委員会が内紛状態にあったことが原因であった。
- 26) 執行委員会はこのデモの行動の一部を非難して、デモ隊がストライキに勧誘した工場を再開させるなど混乱した行動を示し始めた。Bruce, p. 281。
- 27) かれらはシュラー・ホールで「執行委員会」を非難した。Bruce, p. 282。
- 28) カーリンはのちに、このころ「執行委員会」は片や Committee of Public Safetyを中心とする勢力と、片や暴力を唱導する勢力の二つの巨大な勢力の板ばさみになったとのべ、後者を“outsiders”と呼んでいる。Burbank, p. 172。
- 29) 前述のイースト・セント・ルイスやカロンデレートなどの州軍の臨時警察を増強しようとする努力がこの日も続けられ、これが「執行委員会」の武装として一部の新聞に書かれたが、これも秩序を維持するというわくをまったく出なかったようである。Burbank, pp. 130~132。
- そしてオーヴァーストルツ市長がこのような動きを承認することは、ゼネ・ストを補強するという意味をもった。Burbank, p. 138。
- 30) 一部の労働者が警察に対抗するための武器を「執行委員会」に要求したり、群集にまぎれこんだ私服警官が武器をもって立ち上れと煽動したことは事実のようである。Burbank, p. 136。
- もっとも表面的には、「執行委員会」は鉄道労働者の賃金引き上げ、8時間労働制、幼年労働の禁止の立法化を市長や知事に要求し続けていた。Dacus, J.A., *Annals of the Great Strikes in the U. S., 1877,*
- 31) その論拠は「執行委員会」の過大評価に加えて、州軍側よりも労働者側に南北戦争中の歴戦の勇士が多かったという点であった。
- 32) 「執行委員会」の2大指導者のうち、アルバート・カーリンはひじょうに若くてそのような経験はなく、ピーター・ロフグリーンは知識人で、2人ともそのような事態に対処する方法を知らなかったという事情もあった。Burbank, p. 142。
- 33) 内部にいた500人中73人が逮捕されたが、執行委員会ではジョン・N・グレンとトマス・カーティスが逮捕された。カーリンら主力指導者たちは他のメンバーたちと、とがめられずに外へ出てしまった。Burbank, pp. 143~144。
- マーチンは襲撃の噂を聞いて委員会が恐慌状態となり、屋根伝いに逃げたとしている。Martin, pp. 416~417。
- 34) のちのカーリンの発言によれば、“従来の市長の態度からすれば、なぜ逮捕活動をやったのか理解できない”のであって、市長の微妙な立場が推察される。Burbank, p. 146。
- 35) これがセント・ルイス近辺の鉄道ストで機関士たちがストを行った唯一の場合であった。Burbank, p. 174。

36) 前出のシュルツ内務長官もヨーロッパで革命運動の経験があったように、この場合の検事もアイルランドのフェニアン運動の経験者であった。この辺に単に保守的とは言い切れない当時のアメリカの行政、司法界の一特色があると考えられる。

37) Samuel Yellen; *American Labor Struggles*, 1936と、Philip Foner; *History of the Labor Movement in the U. S.*, 1947は、ともにカーリン、コープ、フィッシャー、ロフグリーンが2,000ドルの罰金と5年の刑を課せられたとしているが、バーバンクはそれは事実ではなかったとしている。Burbank, p. 187。

9. その他の地域

ノーザン・パシフィック鉄道は賃金切り下げを行おうとしていなかったものでストライキを免れたが、カンザス・シティではカンザス・パシフィック鉄道、ミズーリ・カンザス・アンド・テキサス鉄道、ミズーリ・パシフィック鉄道、アチソン・トペカ・アンド・サンタフェ鉄道では24日からストライキが始まり、カンザス・シティでも貨物列車の運行が停止し、かん詰工場、揚穀機、機械工場が閉鎖された。酒場や市街電車も停止し、市の活動はほとんど停止したが、組織的なパトロールが行われ、鉄道労働者も秩序を守ろうとする態度で暴力事件にはならず、29日にはストは妥結した。

セント・ジョセフ市でも、24日からハンニバル・アンド・セント・ジョセフ鉄道、カンザス・シティ・セントジョセフ・アンド・カウンスル・ブラフ鉄道、ミズリー・ヴァレー鉄道でストライキが生じ、30日まで続いたが暴力事件は発生しなかった。ハンニバル市でもミズーリ・カンザス・アンド・テキサス鉄道やハンニバル・アンド・セントジョセフ鉄道でストライキが始まり、25日には市の事業活動が停止するが、30日にはもとに戻った。ユニオン・パシフィック鉄道ではすでに18日ごろから不穏な情勢が見られ、22日にはかなり激しい労働者の動きが見られ始めたが、その日の午後経営陣が賃金切り下げを撤回したので事態は平静になった。デンバー市もカンザス・パシフィック鉄道の影響などのため列車運行停止も見られたが、ストライキには至らなかった。

かなり激しい騒動が見られたのはカリフォルニアであった。カリフォルニア地方は当時異例の早ばつとその結果の穀物の不作と家畜の死亡に悩んでいた。さらにトマス・スコットがテキサス・パシフィック鉄道をカリフォルニアまで敷設することに失敗したことなどを含んで、73年の恐慌の影響が各方面で見られ、下層農民や労働者の窮状は甚だしいものがあった。鉄道はセントラル・パシフィック鉄道の“ビッグ・フォア”のハンティントン、ホプキンス、クロッカー、スタンフォードが独占的に支配していたが、そのような情勢のもとで新しい鉄道建設を中止し、当時5万人を数えた中国人労働者が鉄道建設の肉体労働の働き場を失い、仕方なく漁業や家事手伝いや製靴業や繊維業などへ進出した。かれらが最低の貧民窟に住み、賭博や阿片や売春の悪習をもっていたこともあづかって、かれらの低賃金が白人労働者を苦しめているという感情が白人労働者の間に拡がった¹⁾。その結果、他の地域の鉄道ストライキの影響をうけて23日の夜サン・フランシスコのシティ・ホール前で行われた the Workingmen's Party 主催の約1万人が参加した集会のあと、その参加者の一部が中国人街で若干の暴力事件と放火事件を起す騒ぎになった。その翌日には Committee of Safety が組織され始めるが、その夜も会合²⁾のあと警官の大量出動にも拘らず中国人襲撃が行われ、25日の夜もパシフィック・セントラル鉄道傘下の波止場で倉庫の火事³⁾をめぐって群集と警官隊が衝突⁴⁾した外、中国人街でも中国人排斥の暴力行為とそれを警官隊が規制するという騒ぎが続いた。26日には増強された自警団と警察が平穏をとり戻した。また25日にはミシガン州へもストライキが波及し、デトロイトでもミシガン・セントラル鉄道やグレート・ウェスタン鉄道でストライキが生じた。

南部ではルイヴィルで、ルイヴィル・アンド・シンシナティ・ショート・ライン鉄道で8月1日から行われる予定の賃金切り下げに反対する動きが23日に生じた。この鉄道は管財人マクレオドの責任下にあったが、かれが不在であったのでブルース判事が賃金切り下げ回状を撤回した。24日もルイヴ

イル・ナシュヴィル・アンド・グレート・サザン鉄道が労働者に譲歩して従来の賃金を回復した。しかしジェファーソンヴィル・マディソン・アンド・インディアナポリス鉄道やオハイオ・アンド・ミシシッピ鉄道ではストライキが始まり、ルイヴィル・アンド・ナシュヴィル鉄道でも黒人労働者が中心となってルイヴィル市内でデモが発生した。それはかなりの投石事件に発展し、警官隊と州軍が出動し、街を制圧した。ルイヴィル・アンド・ナシュヴィル鉄道は25日に妥協点に達したが、26日には靴製造業、繊維工場、練瓦工、家具工の間でストライキが生じ、鎮まるまでに数日を要した。

その他、テキサス・アンド・パシフィック鉄道でも24日にストライキが発生し、テキサス州のガルベトンが不穏な形勢になった。とくに黒人労働者の白人労働者と同じ給料を要求する動きが中心となり、黒人波止場人足のストライキも加わって8月始めまで若干の騒動が続いた。以上の外若干の都市でストライキや不穏な状況が見られたが、全体としてこのストライキに関しては、南部では北東部とともに大規模な騒動は見られなかった。

- 註 1) とくに Hoodlums, Bummers と呼ばれた失業者たちの反中国人感情が激しかった。Martin, p.420
- 2) 会合中から中国人問題を議論せよという風潮が強かった。Dacus, pp.414~416。
- 3) この火事も煽動的性質のものであり、消防隊は消火を妨げられた。Dacus, p.416。
- 4) 双方の側から約百発の発砲が行われ、数人が死亡、数十人が負傷したとされるが、詳細は不明である。Dacus, p.417。

10. 結 び

以上、Bruce, Dacus, Martin, Burbank の4冊を材料にして、77年の鉄道ストライキをとくに大都市に重点をおいて概観した。

すでにこの全国的ストライキの背景については1の項で述べたが、事態がある程度精しく見た現在、このストライキを通じて見られる諸問題を整理してみよう。

まず感じられる点は、それが自然発生的傾向を強くもっていることである

う。自然発生的という表現は、あるいは無計画的ないし指導性の欠除という表現に変えてもよい。この背景には失業者問題、当時の都市問題がからんでおり、¹⁾ほとんどの場合鉄道労働者のストライキがあまり間を置かず失業者や十代の青少年の暴力行為に転化してしまっている。この点では一揆的（あるいは“パンよこせ”的運動の）性格も濃厚であり、これが市政を混乱させてしまうことから、市長——州知事——大統領の順で治安維持のため軍隊を要請することになる。そして多くの場合州軍は無力であるから（この場合州軍の構成員の多くが労働者であったことを考えなければならない。）連邦軍が比較的簡単に出動する。そして労働者側はこれによってストライキが敗北することは知っていたながら、これに直接的に抵抗しようとはせず、失業者群と同様に比較的簡単に屈服してしまう。一般に警察や州軍にたいしては労働者たちは自分たちのストライキを守ろうという態度を示し、その段階ではストライキは持続するが、連邦軍にたいしては（連邦軍が出動するころはかなり暴力事件が発生しており、鉄道会社側に有利な情勢となっている）ほとんど無抵抗に屈服してしまう。諸鉄道会社がストライキ破りのための軍隊出動に頼ったことは当時の労働者にもよくわかっていたと思われるが、基本的に連邦軍に対抗するような準備がなされていなかったこととともに、労働者層が連邦政府にはかなりの信頼感を抱いていた（あるいは暴動状態の中ではむしろそれに頼らざるをえない面さえあった）のであろう。ストライキが自然発生的であったという限界から、労働者たちが「アメリカ民主主義体制」の中で問題を考える以上の自らの理論的立場を見出すことができず、労働者対鉄道会社の争いにおいて、少くとも中央政府は「中立」であるという“幻想”から労働者をふくむ一般大衆は抜けだすことができなかつたのであった。

そして、一方かなりの理論的態度をもって登場する the Workingmen's Party of the U.S. が、賃金の引き上げ、8時間労働制、幼年労働の禁止の原則をそのまま中央政府にぶっつけようとするが、各鉄道会社や州政府に対決するための現実的政策よりも理論的政策論に終り、一方連邦軍に対抗

するような組織力を持たないことから重要な段階で弱さを暴露せざるをえなかった。それが前から持続的に労働者層に支持されているのではなく、このストライキの発生によって急に正面へ押し出された事情もあって、鉄道会社と現場でたたかっている労働者層、それをとりまく失業労働者層とはかなりの意識のづれがあった。(この点は、セント・ルイスの場合など悲劇的な形で表われる。)このように鉄道労働者層(これにも機関士の熟練労働者層と非ないし半熟練労働者層がある)失業者群、理論的指導者層の間にかかなりの行動目標のずれが見られ、それが統一される形勢には達しない。以上のような諸条件を考えると、それがパリ・コミューンに類似しているという当時の新聞の論調はかなり表面的現象に捕われているといわなければならない。

しかし、一面、全国の3分の2の都市に波及したこの一連のストライキはかなりの必然性をもっていたのであり、その実態の検証のなかでみられる民衆のエネルギーはけっして偶然的とは言えないひじょうなものである。その中心的な面は5・60年代に進行してきたアメリカ鉄道業の産業資本化であり、鉄道業における資本と賃労働の対立が各鉄道会社内でもっとも重要な問題になってきたこと、とくに資本家的経営陣の側で、労働者の剰余労働を極度に増大せしめる機構が鉄道会社間の競争の中ででき上り、73年恐慌の深化の時点で賃金切り下げと技術的發展を土台とした労働力節約の合理化方策が、熟練労働者および非ないし半熟練労働者の対立を利用して極端にまで採用され、それらが失業者の増大という経営陣にとって有利な情勢の中で社会的不安を生むまでに押し進められたことであった。このような鉄道業における資本・賃労働の対立が、鉄鋼業を中心に躍進しつつあったアメリカ資本主義の全社会構造の矛盾の火つけ役となり、失業者層や他の多くの産業の労働者もこれを契機に立ち上り、一部のすでにかかなり工業化していた大都市ではゼネ・スト的狀況にまで発展したのであった。大局的に見れば、このストライキはアメリカ資本主義の成立にともなう必然的な現象であった。

鉄道業は当時商品・人間輸送を通じて全国的な網を形成しつつあった。

すなわち当時の資本主義化の波のなかで拡大しつつある市場間の連絡の役割を果しつつあったのであったが、それは同時にストライキを含む社会的不安、軍隊出動の運搬役でもあった。すなわち、思想、政治、軍事力すらが鉄道を通じてかなり早急に全国を覆いつくす体制がすでにこの時期にでき上がっていたことがわかる。このような意味で、セント・ルイスのストライキの鎮圧の時期がワシントンで決定されたこと、東部の都市の暴力事件を見て西部の都市では暴力を避けようとする努力が双方の立場からなされた（この結果セント・ルイスでは複雑な状況が現われた）ことのような現象が注目に値する。このことはアメリカ全体の資本主義化の波のなかで、それ自身産業資本として成長しつつあった鉄道の果した多様な役割を示すものであろう。

地域的に見て北東部と南部に騒乱が少なく、その間のニューヨーク州、ペンシルヴァニア州からミズーリ州にかけての地域ではほとんどの都市が騒乱状態になったことの原因は、この地域でアメリカの19世紀後半型の経済成長——ペンシルヴァニア西部の鉄鋼業とその原料生産地域を中心とする発展、西部の農業と工業化の発展による市場の拡大・深化——がもっとも激しく進展していたことであろう。これらの諸点はそのまま鉄道の発展の基盤であり、この地域でもっとも激しく鉄道会社間の競争が展開されていたのであろう。

それにしてもこのストライキの実態を見て感じるのは当時の都市がいかに悲慘であったことである。これが73年恐慌に続くひどい時期¹⁾の底であったとしても、その住宅事情、幼年労働、失業青少年問題、家族を養うだけの給料を稼ぐことのできない大人たちの世界は、ストライキの途中各所で見られる食糧その他の略奪事件を正当化するほどのものであった。たしかに、この後19世紀の末に向って、技術教育の必要などから学校制度が充実され、アパートの建築方式も改善されていく²⁾にしても、それがこの全国的ストライキなどに見られるような騒動を防ぐという意味があったのではないかと考えることは悲観的すぎるであろうか。ともあれ、このような都市を作り出すの

に鉄道の発展も大きくあづかっていたことを考える場合、当時の鉄道の発展がそのまま文明を生み出したといった楽観論は充分反省されなければならないのではないか。

ストライキの結果についてみると、まず鉄道会社の受けた被害については *The New York Journal of Commerce* 紙は5大幹線鉄道だけで、2,625万ドルの損失であったと計算した。最大の被害を被ったペンシルヴァニア鉄道は、77年の8月、11月の配当支払を中止しなければならなかったし、トマス・スコットのテキサス・パシフィック鉄道計画が大きく阻害されるなど、その後のスコットの経営失敗に大きく影響したようである。

労働者は直接的には得るところはほとんどなく、多くの解雇者を出した会社が多かった³⁾。しかし、当時の新聞はこのストライキの結果を“引き分け”もしくは労働者側に有利としたものが多かった。その理由は、このストライキによってこれまでくり返されてきた賃金切り下げが中止したことであり、多くの鉄道経営者が労働者の窮状と力を認識して、年金、保険制度を創設した会社が多く、労働者のための病院を建設し始めたものもあったことであった。

さらにこのような騒動の鎮圧のための連邦軍の増強が議論されたがこれは実現せず、代りにペンシルヴァニア州のように州軍を整備、再組織した州が多かった。

そして労働関係立法が法律界にとって重要な問題として登場してきた⁴⁾。その他より間接的には、農民の反鉄道運動と関連して、鉄道会社間の行きすぎた競争を規制する州際通商法へ向う論議も始められた。その他、青少年問題、教育問題も論議され始め、その後の the Workingmen's Party (Socialistic Labor Party)、緑背紙幣労働党、労働騎士団、AFLなどの労働諸組織もこの大ストライキに大きな影響を受けることになった。

総じてアメリカは明白に近代社会的な階級対立の様相を濃厚に呈し始めた

のであった。「アメリカ民主主義」は基本的にその存在理由を問われ始め、一面その形骸化の課程が始まるのである。

- 註 1) 73年の恐慌における都市の失業問題については、Herbert H. Gutman, *The Failure of the Movement by the Unemployed for Public Works in 1873. Political Science Quarterly*. Vol, VXXX, June, 1965. No. 2. および、同じ H.H. Gutman による *The Tomkins Square "Riot" in New York City on Jan. 13, 1874: A Re-examination of Its Causes and Its Aftermath, Labor History*. VI (1965) pp. 44~70がある。
- 2) この点、拙訳、L.M. ハッカー、アンドリュウ・カーネギーの世界、1971. 嵯峨野書院、下巻、第9章、第10章、参照。
- 3) たとえば、バーリントン鉄道では131人が解雇された。Bruce, p. 131.
- 4) cf. Donald L. Mc Murry, *The Legal Ancestry of the Pullman Strike Injunction, Industrial and Labor Relations Review*, XIV (Jan. 1961), Gerald G. Eggert, *A Missed Alternative: Federal Courts as Arbiters of Railway Labor Disputes, 1877~1895. Labor History*, Vol. 7. 1966, No. 3 など。

1877年7月、鉄道ストライキ、西部の事件一覧

	オハイオ州	インディアナ州	イリノイ州	セント・ルイス	その他の西部
7月 18日 (水)	B & O. ニュワーク でストライキ。				
7月 19日 (木)					
7月 20日 (金)					
7月 21日 (土)	オハイオ州軍ニュー ワークへ出動。	ピッツバーグ・フォ ートウェイ・アン ド・シカゴ鉄道でス ト始まる。			
7月 22日 (日)	バン・ハンドル鉄道 の労働者ニューワーク に集る。シンシナテ ィ騒動。	オハイオ・アンド・ ミシシッピ鉄道でス ト始まる。		夜、イースト・セン ト・ルイスでスト始 まる。	ユニオン・パシフィ ック鉄道賃金切り下 げ撤回。
7月 23日 (月)	コロンブス市のユニ オン・デポットの群 集増加。ザンネスヴ ィル、クリーヴラン ドでスト。	フォート・ウェイ ンのスト拡がる。ヴァ ンダリア鉄道でスト 始まる。		夜、セント・ルイス 市で the Working men's Party の集会	サン・フランシスコ で中国人襲撃始まる
7月 24日 (火)	シンシナティ前日よ り騒乱状態		ミシガン・セントラ ル鉄道からシカゴの 鉄道スト始まる。	セント・ルイス市徐 々に緊張状態。夕方 連邦軍到着。夜「執 行委員会」ゼネ・ス ト宣言。	カンザス・シティの 諸鉄道スト。セント ・ジョセフでも諸鉄 道スト。ルイヴィル ガルベストンで騒動
7月 25日 (水)	トレド市でデモ		イリノイ・セントラ ル、バルティモア・ アンド・オハイオ、 ロック・アイランド シカゴ・バーリント ント・ウィンジャー鉄 道スト。	セント・ルイス市、 ルーカス・マーケッ トおよび市内各所で デモ。増強連邦軍セ ント・ルイスへ向う	サン・フランシスコ ル市商工業活動停止
7月 26日 (木)		P. F. & C. 鉄道労使 交渉。ウォバッシュ 鉄道スト終結	朝シカゴで騒乱起り 始める。連邦軍到着 巨大騒動。ヘオリア で騒動	ルーカス・マーケッ ト広場中心のデモ続 く。反労働者勢力増 強。	

64 1877年のアメリカ 鉄道ストライキ(II)

	オハイオ州	インディアナ州	イリノイ州	セント・ルイス	その他の西部
7月 27日 (金)	レ ー ク ・ シ ョ ア 鉄 道		シカゴの事態平静へ 向う。	セント・ルイス市警 察の活動活発化。午 後警官隊シュラー・ ホール襲撃。	
7月 28日 (土)	運 行 停 止			イースト・セント・ ルイスへ連邦軍出動 セント・ルイス平静 化へ向う。	
7月 29日 (日)		P. F. & C. 鉄道脱 落者出はじめる。		イースト・セント・ ルイスで列車封鎖解 除。	
7月 30日 (月)					
7月 31日 (火)				セント・ルイスの州 軍解散。	
8月 1日 (水)		インディアナ州の鉄 道ストほとんど終結			
8月 2日 (木)	B & O. バン・ハン ドル鉄道貨物輸送再 開。	P. F. & C. 鉄道スト 終結。			
8月 3日 (金)	レーク・ショア鉄道 元に復する。				